

描かれた三角縁神獸鏡

—『千とせのためし』所収

狩谷掖斎旧所蔵品について—

徳田 誠志

はじめに

東京竹橋にある国立公文書館（千代田区北の丸公園三番二号）は、明治政府発足以来の公文書と江戸幕府から引き継いだ紅葉山文庫・昌平坂学問所の図書を所蔵し、わが国の中央公文書館として昭和四六年以来運営が続けられている。平成一三年度からは独立行政法人として新たなスタートを切るとともに、春秋の特別展示会にあつては一層盛大なものとなり、公文書館の存在とその意義を一般の人々に伝えるよい機会となっている。

さて、筆者の勤務する書陵部庁舎と公文書館は、お濠を挟んで向かい合う位置にあり、春と秋の展示会の際は欠かさず観覧してきた。今年度（平成一八年度春）のテーマは、「大名 著書と文化」と題されたものであり、四月八日から二七日までの日程で開催された。考古学を専門とする筆者にとって、江戸時代のくずし字はまったくといっていいほど読むことができず、また登場する大名についても世間一般並みの知識しか持ち得ていない。しかしながら毎年足を運ぶ理由としては、カラー図版と

わかりやすい解説を載せた小冊子がもれなく頂戴でき、字が読めなくてもわかるように工夫された絵図面などが出展されており、それなりに楽しむことができる展示となつてゐるためである。

よつて今年も特に下調べをすることなく、また何が見たいというものでもなく出かけたのであるが、展示の後半にあつてケース中に、図譜に描かれた三角縁神獸鏡を見つけることとなつた。このときの驚きは大きく、思いもかけない展示資料におもわず「エッ」と声を発したかもしれない。周りの人々からは不審な目で見られたかもしれないが、それまではまったくブラブラと眺めていただけであつた態度が急変し、ガラスケースに鼻先をこすりつけんばかりにのぞき込むこととなつた。まさか自分の専門分野に関する史料がこの展示会に出展されているとは夢にも思わず、まさに青天の霹靂の思いであつたことは今でも鮮明に記憶している。

しかしながらいかんせん昼休みという短時間であり、またガラスケース越しであつたために、描かれた銅鏡が三角縁神獸鏡であることは見極めることができたものの、銘文などの詳細は読みとることができず、この史料に描かれた三角縁神獸鏡の詳細については不明のまま引き返すこ

となった。そこで展示会終了後、公文書館に今度はこの史料のみを閲覧に出かけて、あらためて描かれた三角縁神獸鏡と対面することとした。以下、その報告をかねて、小文を草しておくこととしたい。

さて、本稿の目的とするところはこの描かれた三角縁神獸鏡の詳細を報告することと、現在原物が確認できず、この絵図が唯一の資料となる鏡の考古学的な意義付けについて記述することにある。さらには江戸時代後期から末期にかけての、国学や古物学の一端にも触れてみたい。なぜならば、次の明治時代以降の博物館行政、あるいは史料編纂事業は少なからずこの江戸時代以来の国学はもちろんのこと、古物学あるいは物産学と称される学問がその背景にあったことが大きいものと考えていることによる。今回扱う史料としては古鏡一面の絵図だけであるが、この鏡を通して江戸から明治にかけての博物館の成立過程や、背後にあるわが国の知識階級の研究視点やその到達点も見通していくことを究極の目的として掲げておきたい。

一、『千とせのためし』と編者水野忠央について

それではまず三角縁神獸鏡が掲載されている史料『千とせのためし』と、その編者についてみていくこととする。

『千とせのためし』（別題『千歳例』）については、展示会の図録『大名―著書と文化―』を参照しながら記述していきたい。^①本書は古筆・古画・古器物を掲載した考古図録であり、全二二折の折本（大本）一帖である。^②古筆としては藤原定家、西行、後鳥羽院の古筆が掲載され、考

古品としては後述する鏡や古鈴（馬鈴か）など二二点の精巧な多色刷りの模写図が収録されている。他に前田夏陰による嘉永三年（一八五〇）の序文と、村田春野による同四年（一八五一）の跋文があり、江戸鍛冶橋五郎兵衛町にあった書肆中屋徳兵衛から販売されている。何部出版されたものか不明であるが、現在ではこの国立公文書館を始め、京都大学谷村文庫、東京大学史料編纂所などの大学機関や、岩瀬文庫、神宮文庫などの著名な文庫に所蔵されている。^③また現在では、朝倉治彦監修のもと『定本 丹鶴叢書』の第三二巻に公文書館所蔵図書の影印版が収録されており、比較的容易に目にすることができる。^④

序文を記した前田夏陰は、幕臣であって『蝦夷志料』の編纂主任を務めた人物であり、後述するように水野忠央が蝦夷地の探索を試みたことと深い関係があるものと思われる。跋文を載せる村田春野は一時期大阪でも活躍した村田春門の次男であり、丹鶴書院において「止戈類纂」の編纂に携わった小中村清矩に律令を教示したことから、忠央の近くにいた国学者の一人であるといえよう。^⑤

続いてこの図録を編集した、水野忠央についてまとめておきたい。忠央は文化十一年（一八一四）に生誕し、慶応元年（一八六五）に五二歳で没している。^⑥この間の主な事跡としては、江戸定府の紀州藩付家老として活躍するとともに、井伊直弼と組んで紀州藩主慶福を第一四代徳川幕府の將軍（家茂）に擁立することに成功する。このように中央政権の中枢を担うとともに、藩にあつては製紙・窯業（瓦の製造）などの産業育成に取り組み、北海道の探査も試みている。また、和学所・蘭学所の創設や、フランス式の軍事教練を取り入れるなど先進的な一面も併せ持

つ。そして文武両道を実践するかのよう、学問についても積極的に奨励し、その結果として『丹鶴叢書』の編纂に取り組む。「丹鶴」とは自らが城主を務める（三万五千石の石高を誇るものの忠央の代までは大名とは認められず、子の忠幹の代に大名としての扱いを受けることとなる）、現在の和歌山県新宮市に所在する新宮城の別名でもあり、忠央の号でもある。

この『丹鶴叢書』は弘化四年（一八四七）から、嘉永六年（一八五三）にかけて刊行され、四三種七帙一五四冊からなる叢書である。この叢書には丹鶴書院に集められた四万冊ともいわれる図書のうちから、珍しい歌集・物語・日記・記録・行事・縁起・図録などを翻刻している。

筆者の業務に関連する史料としては、「戊申帙」に収録された『諸陵雑事注文』がある。この書物は、治承年観（一一七七～八一）の控えに基づいて、正治二年（一二〇〇）十一月に記述された年中公事の供物等の品目及び数量などを陵墓ごとに記入した小冊子である。この史料に「近江國木岡御陵」とあることから、現在宮内庁では滋賀県大津市下阪本に所在する木の岡古墳群のうち、帆立貝形前方後円墳を呈する丸山古墳を、天智天皇皇后倭媛陵の可能性があると見て下阪本陵墓参考地の名称で管理している（その他近在する古墳についても、五基を陪冢として併せて所管している）。この陵墓参考地の是非については多方面から検討されているところであるが、この史料については平安時代末期の陵墓管理の実態を知ることのできる第一級史料となっている。

話がそれだが『丹鶴叢書』は、単に稀覯本を蒐集したというわけではなく、学者による調査研究にも力を入れ、校訂も厳正であったことが知

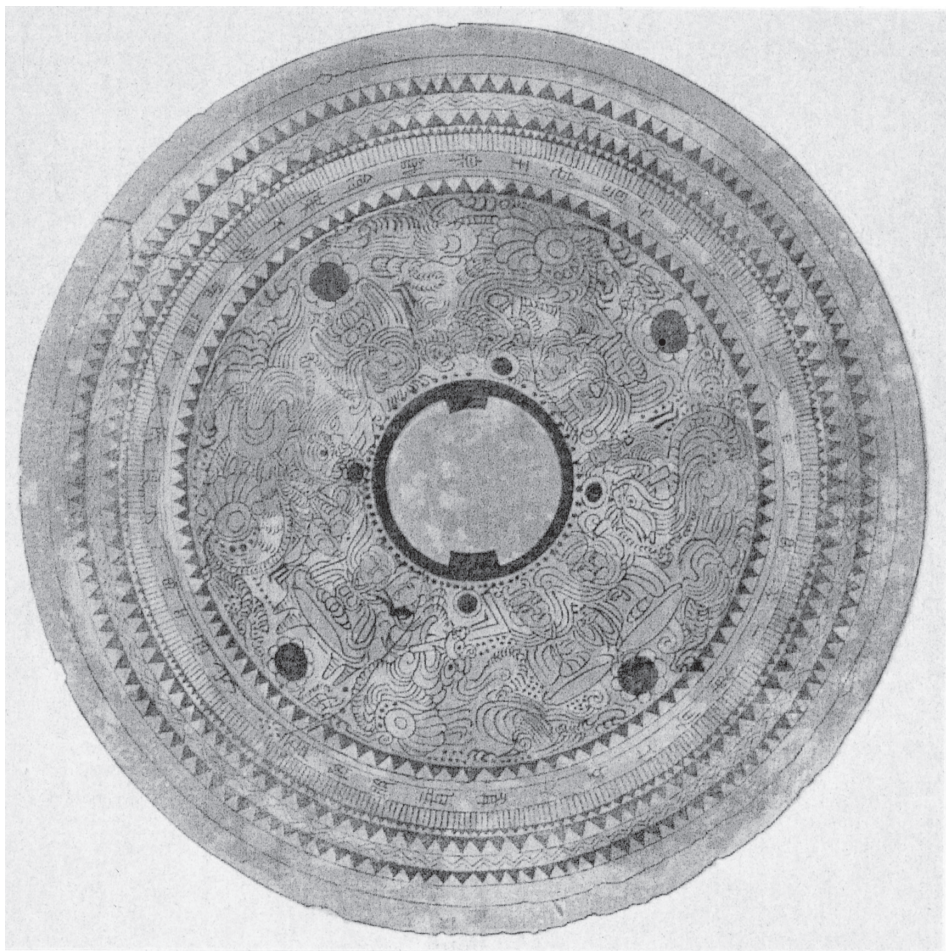
られている。そして最上の版本を用いるなど、調査・編集・印刷に到る徹底した管理と費用を惜しまない出版事業として特筆される^⑦。この『丹鶴叢書』は忠央のもと、一千冊の刊行を目指したというが、安政七年（一八六〇）に井伊直弼が桜田門外の変で暗殺されると、忠央も中央での政治力を一挙に失うこととなった。そして息子忠幹に家督を譲って、強制的な隠居謹慎処分を受け、以後政治の世界に戻ることはなかった。この忠央が追われると同時に、この叢書の出版事業も中断を余儀なくされるに至ったものと思われる。明治維新後、丹鶴書院に所蔵されていた書物は散逸したというが、宮内庁書陵部には所蔵されるに至った経緯は明らかではないものの、一、二一六点という最もまとまった数量が引き継がれている^⑧。

『千とせのためし』は、『丹鶴叢書』には含まれないものの、『丹鶴外書』として『丹鶴図譜』などと併せて、忠央の編纂した図録である。個々の古物を掲載した由来については明らかでないが、序文、跋文ともに忠央がいにしえの研究にあたって、様々な古筆、古物を書き写したことが記されている^⑨。

二、描かれた三角縁神獸鏡とその同範鏡について

次に、掲載されている三角縁神獸鏡についてみていきたい。そしてここに描かれた鏡と同範と思われる鏡が奈良県佐味田宝塚古墳から出土している^⑩ので、その鏡との比較検討を行っていききたい。

『千とせのためし』に掲載された鏡は（以下、千とせ鏡）、第1図に示



第1図 『千とせのためし』掲載 三角縁神獸鏡（国立公文書館所蔵）



第2図 奈良県佐味田宝塚古墳出土 三角縁神獸鏡（註⑫より）

したとおりである。鏡は直径一四・五cmほどに描かれており、緑銹が浮いている様子を示すかのように薄い青緑色に着色され、地色としては薄茶色を呈している。右上に「漢古鏡 径七寸 縁厚四分以曲尺度之」と記されているのみであり、出土地、来歴などの情報については知るよしもない。鏡がきわめて精緻に描かれていることは一目瞭然のことであり、び割れの状況もありアルに表現されている。また、縁の外周が銹化している状況なども勘案すると、本鏡がいずれかの古墳から出土したものであることは十分に察せられるものである。

この直径が二・一cm、縁厚一・二cmを測り、外区の文様（鋸歯文＋複波文＋鋸歯文）と、内区の神・獣像の表現、さらに副文帯としての銘文が認められることなどあらゆる特徴から考えて、この鏡が三角縁神獣鏡であることは間違いないと判断できる。

さて、本鏡と同范と考えられる鏡が奈良県佐味田宝塚古墳から出土している、この鏡と比較検討しながら詳細を見ていきたい。まず佐味田宝塚古墳について概要を記しておく。本古墳は奈良盆地の西部に広がる馬見丘陵に位置し、墳丘長一一・五mを測る前方後円墳である。外部施設として埴輪と葺石が認められ、内部施設は粘土槨と考えられる。築造時期としては、同じく馬見丘陵にある新山古墳（大塚陵墓参考地）に引き続き築かれたものと考えられ、古墳時代前期後半に位置付けることが可能であると考えている。^⑩

この古墳は明治一四年には盗掘の災禍を被り、多数の出土品が発掘された。出土品の数量については、原物と盗掘時の書類、さらには博物館の所蔵品目録の数量との間に齟齬があることから、厳密には確定しづら

いところがあるが、現在宮内庁書陵部と東京国立博物館、さらには奈良国立博物館の三カ所に分散して、鑑鏡三六面以上、玉類、石製品、銅鏃、巴形銅器等が出土している。^⑪

これらの出土品のうち今回取りあげる鏡は、現在東京国立博物館が所蔵するものである（所蔵番号J一二六八）。この鏡の図は第2図に示したとおりであるが（以下、宝塚鏡）、この図は平成一五年度以来研究を進めてきた、科学研究費による三次元レーザ計測によって作製したものである。^⑫ この図からもわかるように本鏡は数片に割れたものを接合しており、破片のない部分については漆などで補修されている。しかしこの接合については、銘帯部分の接合は誤っているという指摘がある。^⑬

続いて、鏡の詳細を見ていきたい。千とせ鏡でわかるように、向き合う二獣の間に三山冠をつけた東王父が天蓋の下で乳の上に座っている姿が見え、紐を挟んだ向かい側には双鬘冠をかぶった西王母が座している。このように獣像と獣像の間にそれぞれ東王父と西王母を置く文様が一位となり、対置式の構図をとる。そしてこの文様の間には、一方は双鬘冠をかぶり、翼がのびる二神像が刻まれる。紐を挟んだ対面には立像の小羽仙を伴う一神が配置されている。宝塚鏡では、西王母と並列した二神の対面にあるべき神像部分が欠損しており、この位置に二神が配置されていたと考えることから六神四獣鏡と記されることが多い。^⑭ しかしながら、千とせ鏡において明らかのように、神像は東王父、西王母を含めて五神であり、獣像は二体が向き合う形で配置されており合計四獣である。すなわち神獣像配置の分類では「U」に区分されているものであり、五神四獣の配置をとるものである。^⑮

次に銘文であるが、千とせ鏡にしたがって、以下のように記述しておく。

「吾作明竟甚大好 上有東王父西王母 仙人王喬赤松子 渴飲玉泉
飢食棗 千秋萬歲不老 汭由天下由四海兮」

この銘文と最も近い例としては、同じく五神四獣の配置をとる京都府椿井大塚山古墳出土鏡（京都大学総合博物館 所蔵番号M二二 同範番号一四）であり、相違する点としては宝塚鏡には、最後の一句が付加された銘文となつてゐるところである。以上の文様構成を整理して、本鏡に最もふさわしい型式名を与えるとすれば、「対置式 吾作銘五神四獣鏡」とするのが適當であると判断する。

いまだ少し本鏡の特徴を、西田守夫氏の觀察を参考にしながら見ていきたい。^⑩ その大きな特徴の一つが、獣像の肩の部分が環状乳となつてゐるところであろう。本来このような環状乳を持つ獣像は画文帯神獣鏡に用いられることが多く、三角縁神獣鏡において環状乳を持つ獣像が配置される鏡としては、奈良県富雄丸山古墳出土と伝えられる四神四獣鏡のみである。^⑪ もう一点の特徴は、神像が座る四乳がすべて外向花文座を伴うことであり、これは画像鏡の影響があることを示していることである。

すなわちこの鏡は三角縁神獣鏡の成立にあたつて、環状乳画文帯神獣鏡と、画像鏡の影響が強く働いていることを示すものであり、三角縁神獣鏡の定型が定まつていない時点での製作にかかるものであることが指摘できる。このことは神、獣の表現分類から三角縁神獣鏡の編年観を提示した岸本直文氏の研究からも追認されるところであり、今回検討した鏡にある表現①は、古相を示す三角縁神獣鏡に用いられる表現である。

以上のように千とせ鏡と宝塚鏡を見てきたが、もちろん千とせ鏡は絵図であり、範傷の詳細などは検討できないことから、厳密には同範技法によるものか、同型技法によつて製作されたかについては不明であり、ここでは同じ鏡背文様を持つ鏡という意味で同範鏡という用語を用いて記述してきた。

しかしながら千とせ鏡と宝塚鏡の比較にあつて、決定的に違う部分がある。それは銘文の開始する位置であり、宝塚鏡では珠文に続く「吾作明竟……」は、三山冠をかぶつた東王父の右下から始まる。一方、千とせ鏡では同じく珠文に続いて始まる銘文は、西王母の右下から始まつてゐる。すなわちちょうど一八〇度ずれた地点から銘文が始まつてゐることになる。

これが事実であれば、この二面は同範鏡ではあり得ない。しかしながら、内区の文様配置及びその諸特徴がこれだけ一致し、しかも銘文まで同じであつて、銘文の開始位置だけが異なるという三角縁神獣鏡の例を管見において知らない。このようなことは同じ鑄型を使用し、一方の銘帯の部分だけをその開始位置だけ違えてもう一度銘文を再刻する必要がある。このようなことは技術的には可能であろうが、現実的な鏡の製作ではあり得ないことであつて、この銘文開始位置の違いは千とせ鏡を描いた人物が東王父と西王母をまったく取り違えて銘帯部分を描いたことによるものと判断したい。しかしちょうど一八〇度ずれていることが唯一の根拠であり、逆にこれだけ精緻に文様を描いている人物が、銘文の開始位置を間違えるというミスをするのかという疑問も残る。このことは千とせ鏡の原物が存在しない以上、これ以上の言及は控えておきたい。

以上述べてきたように、千とせ鏡と宝塚鏡は同範鏡の可能性は極めて高く、これまで知られていなかった同範鏡の例を増加することとなった。千とせ鏡の原物がなく、また出土した古墳も明らかでない現時点ではこれ以上の考察は不可能であるが、同範鏡の一例が増加したことに意義を見いだしておきたい。そして宝塚鏡では内区の一部を失っていたため検討できなかった西王母の状況と、五神の配置が確かめられたことも重要な事項として指摘しておく。

三、旧所蔵者狩谷掖斎について

これまで『千とせのためし』に描かれた三角縁神獸鏡について記述してきた。本節ではこの鏡が他の江戸時代史料に記述されていることを紹介し、その所蔵者狩谷掖斎について述べていく。

この鏡の存在は、松崎慊堂が残した『慊堂日暦』の天保八年（一八三七）四月一五日の条に紹介されていることが、森下章司氏によって紹介されている。^⑨ 森下氏の論文に依拠しながら、この鏡についての記述を見ていきたい。

その『慊堂日暦』であるが、その著者松崎慊堂は、江戸時代後期の儒学者として知られる人物である。明和八年（一七七二）に現在の熊本県の農家に生まれ、弘化元年（一八四四）に七四歳で没している。この間苦学して昌平黌に学び、享和二年（一八〇二）には遠江掛川藩校の教授を務めている。掖斎とは文化五年（一八〇八）頃に知り合ったものと思われる、その優れた学識を知るにつけ自分の研究をすべて譲り、掖斎が没

するまで交際することとなった。そして掖斎の死を看取り、その後家財の整理など一切を引き受けている。^⑩

その交流を示す記録として『慊堂日暦』があり、第一・二巻が欠けるものの文政六年（一八二三）四月一四日から始まる第三巻から、亡くなる年の弘化元年三月一九日までの二四冊の自筆本が静嘉堂文庫に残されている。すなわち、慊堂が五三歳から亡くなるまでの二十一年間の記録である。現在は東洋文庫にそのすべてが活字化されており、江戸時代後期における学者の日常や交流を知る貴重な史料となっている。

さて、この『慊堂日暦』の天保八年（一八三七）四月一五日の条を以下に引用する。^⑪

「十五日 晴。出でて藤軒をよぎり、ついに佐倉邸に入る。（中略）且つ懷之のために古鏡の消息を問う。

○求古楼の古鏡 前漢仙人不老鑑。七寸二分。銘、吾作明竟甚大好、上有東王父、西王母、仙人王喬、赤松子、渴飲玉泉、飢食棗、千秋萬歲不老 沅由天下兮、由四海兮。（以下、略）」

この日誌にある「求古楼」は掖斎の号であり、よって「求古楼の古鏡」とは彼が所有していた鏡を指すものであることは間違いない。この「前漢仙人不老鑑」のほかに、「仙人無双鑑」「天王日月鑑」「後漢尚方鑑」と記された銘文のある鏡を含め、合計九面の鏡を所蔵していたことが記述されている。そしてこれらの鏡については、掖斎が存命中の文政九年（一八二六）一月四日の条にも、「前漢仙人不老鑑」「仙人無双鑑」「後漢尚方鑑」の三面の銘文の書き下し文が記されている。^⑫ すなわち、この頃までには掖斎の手元にあった可能性が高い。

さて、この『懐堂日暦』に記された「前漢仙人不老鑑」が、『千とせのためし』に掲載された鏡であることは間違いないものと判断する。その根拠として、直径と銘文がほぼ一致し、唯一の違いは、「天下」のあとに「兮」字が付加されていることである。この「兮」は銘文の最後の文字に使用されるものであり、『懐堂日暦』の記述が間違っている可能性が高いものと考えている。

いましこの鏡の所有者である狩谷掖斎について、記述しておきたい。



第3図 狩谷掖斎肖像画（註②より）

掖斎も懐堂と同じく江戸時代後期の国学者として名高いが、とくに書誌学・金石学の基礎を築いた人物であるとされる。安永四年（一七七五）に江戸にて書肆を営んでいた高橋家に生まれ、その後、弘前藩の御用達を務めていた津軽屋の婿養子に迎えられ、狩谷姓を名乗ることとなった。この津軽屋は大藩の御用商家であり、掖斎自身も裕福な町人学者として和漢の古典籍を蒐集するとともに、古銅器などの古器物を蒐集していたと考えられる。もちろん古典籍・古器物蒐集を趣味としたのではなく、実証的研究を進める目的であったと考えられ、それゆえ彼を考証学者として紹介することも多い。このように掖斎が先述したような銘文のある鏡を所蔵するに至った理由も、まさに金石学の研究のためであると考えられよう。この金石学研究の集大成として、「石川年足墓誌」や「文彌麻呂墓誌」など二九篇の上代金石文を掲載した『古京遺文』を上梓している。^⑤

このような研究に没頭する掖斎の姿を第3図に示したが、彼が手にする鏡は漢鏡とあり、その大きさからして今回紹介している「前漢仙人不老鑑」に見えるのだが、いかがであろうか。

ここでもう一度天保八年（一八三七）四月一五日の日記の内容に戻ると、文中に「懷之のために古鏡の消息を問う。」とあり、天保八年は掖斎没後二年目にあたる。掖斎は天保六年（一八三五）閏七月四日に六十一歳で亡くなっているが、生前すでに津軽屋は長子懷之に家督を譲っていた。懷之は掖斎の亡くなった直後から、津軽屋の経営には苦労していたようであり、天保の飢饉という天災も重なり、結果的に父掖斎の残した古典籍を売却せざるを得なかったことが知られている。^⑥ このため懷之の

評判は決して高くないようであるが、このような背景を知ることによって、先の日誌の内容が見えてくる。すなわち榎斎の死後、津輕屋の経営もままならぬ状況が続き、そのような中で慊堂が遺品の状況を心配するとともに、あるいは少しでも高値で売却することによって、懐之の窮地を救おうとする姿勢を読みとることができる。

『慊堂日暦』によって今回紹介している鏡の来歴を整理すると、文政九年には榎斎の手にあり（但し、彼以前の所有者あるいは出土地については何も知ることができないが）、彼の死から二年後の天保八年までは子息懐之のところにあったと考えて間違いない。その後まもなく売却されたようであり、おそらく他の古典籍などとともに水野忠央のところへ入ったのではなからうか。しかし忠央は天保六年（一八三五）に家督を継いだばかりであり、『丹鶴叢書』の刊行には未着手であり、直接丹鶴書院が購入したか否かについては不明である。榎斎の他の遺品を含めて、その行方を追跡する必要がある。

水野忠央が彼の手に数万冊に上る古典籍を蒐集していたことは先述したが、他に古器物（今日でいう考古品）も手にあったことは間違いない。『千とせのためし』に、三重県飯高郡出土の古鈴（馬鈴か）が掲載されていることは述べたとおりである。他に、書物に掲載された以外の考古遺物としては、かつて皇室に献上されたという金銅装の衝角付甲が忠央の手にあったことを末永雅雄氏が報告している。²⁷⁾

以上、『千とせのためし』に掲載された鏡の来歴について、旧所蔵者である狩谷榎斎を併せて紹介した。

四、まとめ

筆者はかつて、一八世紀半ば頃から勃興してきた、弄石社の活動を取りあげたことがある。²⁸⁾その中心人物が木内石亭であり、あるいは石亭の盟友であって当時「大坂一の知識人」とよばれた木村兼華堂らの活躍を考古学、博物館の祖として位置付けたものである。²⁹⁾これらの活動は木内石亭・木村兼華堂が死去する一九世紀初頭をもって下火となったかに見えるが、一度根をおろした古物学・物産学の勢いは、決して停滞するものではなかった。

その代表的な著作物が、松平定信が残した『集古十種』であろう。他に、藤貞幹が著した『好古日録』、『好古小録』、『古瓦譜』なども幕末の代表的な古物図録であるといえよう。特に前者は、明治四年に太政官から布告された「古器旧物保存方」に示された保護すべき三一種との共通性が指摘されている。³⁰⁾

このような観点から改めて『千とせのためし』に描かれたものを見てみると、「肖像画」・「古筆」・「銅器」・「鑑鏡」など、『集古十種』と一致するものが少なくない。水野忠央が松平定信の成果を意識していたであろうことは間違いない、幕末から明治にかけて『集古十種』が古物図録において、手本とすべきものの位置にあったといえよう。

幕末から明治にかけての物産学、あるいは本草学を主とした「緒輿会」や、水谷豊文が主催した「嘗百会」の活動などについては別の機会に述べることにしたいが、小稿のまとめとして、丹鶴書院において叢書の編集に従事し、その後明治新政府に出仕し、明治前半期の博物館、文化

財行政に関わった人々を紹介しておきたい。

その代表的人物は、小中村清矩・黒川真頼・小杉樫邨の三人である。この三人の履歴に共通する事項としては、明治一二年から編纂が始まった『古事類苑』に関わったことがあげられるが、幕藩体制下ではいずれも紀州藩藩校古学館において顔を合わせている。最年長の小中村清矩は安政四年（一八五七）に、古学館の教授に就任している。^③ 黒川真頼は天保一二年（一八四一）に江戸へ出て、師でもあり義父にもあたる黒川春村のもとで国学を学ぶ。^④ ちなみに、この黒川春村は狩谷棧斎との直接の師弟関係はないが、いろいろと教示を受けたことが知られており、きわめて細い線であるが棧斎の所蔵鏡と丹鶴書院をつなぐことができる。小杉樫邨は阿波徳島藩士の家に生まれるが、やはり江戸において国史、国文を学んでいる。^⑤ 彼らは丹鶴叢書の刊行時には二〇代から三〇代の、いまだ勉学の途中にある身であるが、このときに学んだ知識が、明治維新以後に大いに花開いたことは『古事類苑』の編纂に関わったことから明らかである。

そしてもう一つの側面として、黒川真頼・小杉樫邨ともに、明治初期の博物館行政に大きく関与していく。特に黒川真頼は明治一〇年には内務省四等属として博物館事務取扱を命ぜられ、その後博物局の史伝課長心得となり、仏国博覧会出品事務取扱を命ぜられる。そしてこの博覧会に併せて『工藝志料』全七巻を出版する。^⑥ その後も博物局にあって、考古学的な著書である『穴居考』・『上代石器考』を出版している。役職としては明治一八年に史伝課長兼図書課長となり、博物館が宮内省の管轄となった後の明治二二年には帝国博物館学芸委員となっている。

小杉樫邨についても正倉院御物の整理に深く関わり、東京帝室博物館の評議員を務めている。また、考古学との関わりにあつては、明治二八年四月に今日の日本考古学会（『考古学雑誌』発行団体）につながる「考古学会」を三宅米吉らと設立している。

わが国における博物館誕生にあつては、殖産興業を背景とする動きと古器物の保存と併せて提言された「集古館」の設立を目指す動きが、両者混在となった状況からはじまった。さらにはその博物館（博物局も併せて）に関わった人々も、薩摩藩出身の新政府主流派もいれば、幕府の物産所（開成所）に籍をおいた人もおり、きわめて多彩な顔ぶれであった。

そのなかで黒川、小杉らは江戸時代以来の国学の知識を持って、明治前半代の文化財・博物館行政を推進した人物である。彼の身につけていた国学とは、今日という日本史学・考古学・美術史学・国文学など広い範囲を横断した学問であり、その知識の広さは彼らの残した著作を見れば一目瞭然である。

このように三人の業績はきわめて広範囲にわたっており、とても小稿のなかでは収まりきれないので、いずれ稿を改めて述べていくこととしたい。ただ一つ指摘しておきたいことは、明治維新以後の博物館行政、あるいは文化財行政もその推進した人々は、江戸時代以来の学問を身につけた人々であったということを再認識しておくことである。

おわりに

小稿では、江戸時代の図録に描かれた一面の三角縁神獸鏡を紹介してきた。現在、この鏡の原物は知られていない。

そして、考古学的な観点からは本鏡が、奈良県佐味田宝塚古墳出土鏡と同範鏡である可能性が高いことと、環状乳を持つ獸像が鑄出されている特徴などを指摘した。銘文の開始位置が違うという点をどのように解釈するかについては原物が見つからない以上、絵図面で検討していく限界である。出土地が不明なことも如何ともし難い。

今回の最も大きな成果としては、狩谷掖斎が所蔵しており、松崎慊堂が日記に書き残した鏡が絵図面としてはじめて確認できたことであろう。銘文から三角縁神獸鏡の存在が指摘されてきたが、このことをはつきりと裏付ける史料を提示することができた。そしてその鏡が掲載されていた『千とせのためし』は、水野忠央が主催した丹鶴書院において編纂された『丹鶴叢書』の外書として刊行されている。この『丹鶴叢書』は、近世出版物のなかでも最高水準を誇るともいわれるものである。この鏡が収録された経緯は明らかではないが、狩谷掖斎が所蔵していたものが没後流出し、おそらく国学者のネットワークのなかで水野忠央の手に至ったものと推定している。

その後水野忠央の失脚と幕末の動乱のなかでこの鏡は行方不明となるが、丹鶴書院に集った人的資源は明治維新以後、博物館行政、文化財行政で大きく花開くこととなった。彼らの活躍については今後とも調査を重ねていくこととし、小稿では描かれた三角縁神獸鏡から明らかにする

ことができた、「古物学から博物館へ」の一端を紹介して擲筆する。

註

- ① 国立公文書館 所蔵資料特別展『大名 著書と文化』平成一八年四月八日～二七日
- ② 朝倉治彦監修 「解説 全巻書誌データ」『定本 丹鶴叢書』第三六巻 大空社 平成一〇年九月三〇日
- ③ 「千とせのためし」『増補版 国書総目録』第五巻「すゝて」岩波書店 平成九年五月六日
- ④ 朝倉治彦監修 「千とせのためし」『定本 丹鶴叢書』第三二巻 大空社 平成一〇年九月三〇日
- ⑤ 大川茂雄編『國學者傳記集成』大日本図書株式会社 明治三七年八月廿五日
- ⑥ 小山譽城「水野忠央」『三百藩家臣人名事典』第五巻 新人物往来社 昭和六三年二月一〇日
- ⑦ 川瀬一馬「江戸時代の出版文化（その3）―江戸末期の出版文化」『入門講話日本出版文化史』日本エディタースクール出版部 昭和五八年七月二五日
- ⑧ 宮内庁書陵部「水野忠央旧蔵本 展示目録」昭和四九年一月七日～九日 宮内庁書陵部「水野忠央」『図書寮叢刊 書陵部蔵書印譜』上 平成八年三月二五日
- ⑨ 「千とせのためし」の「序文」「跋文」の翻刻には、宮内庁書陵部図書調査室 池和田有紀氏のお手を煩わせた。記して感謝申し上げる。
- ⑩ 河上邦彦編著『馬見古墳群の基礎資料』橿原考古学研究所研究成果 第

- 五冊 奈良県立橿原考古学研究所 平成一四年六月一日
- ⑪ 「宝塚古墳」御即位一〇年記念特別展『皇室の名宝 美と伝統の清華』東京国立博物館 平成一二年
- ⑫ 『三次元デジタル・アーカイブを活用した古鏡の総合的研究』橿原考古学研究所 研究成果 第八冊 奈良県立橿原考古学研究所 平成一七年一二月二六日
- ⑬ 西田守夫 「三角縁神獣鏡の形式系譜緒説」『東京国立博物館紀要』第六号 東京国立博物館 昭和四五年
- ⑭ 「三角縁神獣鏡出土地名表」『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部考古学研究室 平成元年四月
- 鳥博物館 平成七年四月
- ⑮ 樋口隆康氏は、以前より本鏡に五神四獣鏡の名称を与えている。樋口隆康『三角縁神獣鏡綜鑑』新潮社 平成四年一〇月
- ⑯ 前掲註⑬に同じ
- ⑰ 富雄丸山古墳出土と伝えられるものは現在天理参考館が所蔵しているが、同範鏡とされるもう一面は、現在五島美術館が所蔵するものの出土地が不明であり、扱いは慎重を要する。
- ⑱ 岸本直文 「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第七二巻第五号 平成元年
- ⑲ 森下章司 「古鏡の拓本資料」『古文化談叢』第五一集 九州古文化研究会 平成一六年
- ⑳ 鈴木瑞枝 『松崎謙堂―その生涯と彼をめぐる人びと』研文選書八五 研文出版 平成一四年四月
- ㉑ 梅谷文夫 『狩谷椽斎』人物叢書新装刊 吉川弘文館 平成六年一月
- ㉒ 山田琢訳注『懽堂日暦』五 東洋文庫三七七 平凡社 昭和五年五月
- ㉓ 山田琢訳注『懽堂日暦』二 東洋文庫二一三 平凡社 昭和四七年六月
- ㉔ 前掲註㉑に同じ
- ㉕ 藪田嘉一郎 『日本上代金石叢考』河原書店 昭和二四年 本書の附載として狩谷椽斎『古京遺文』が訳出されている。
- ㉖ 前掲註㉑「付記 懐之の功績」
- ㉗ 末永雅雄 「衝角付冑 鉄地金銅装横矧板鋌留 出土地不詳 帝室御物」『増補 日本上代の甲冑 本文篇』木耳社 昭和五六年一二月
- ㉘ 徳田誠志 「弄石家の残した「石」たち―考古学と博物館学の観点から―」『木内石亭（西遊寺鳳嶺・願行寺了観）関係資料調査報告書』草津市教育委員会 平成一七年一二月
- ㉙ 徳田誠志 「旧木村兼華堂所蔵の鋳形石―奈良県島の山古墳出土品について―」『関西大学博物館紀要』第五号 関西大学博物館 平成一二年三月
- ㉚ 吉田衣里 「古物―江戸から明治への継承―」『近代画説』一二 明治美術学会 平成一五年一二月
- ㉛ 高野知恵子 「小中村清矩」『近代文学研究叢書』第二巻 昭和女子大学近代文学研究室 昭和三十一年四月
- ㉜ 黒川真道 『黒川真頼傳』改訂発行 奈良書店 昭和五四年一二月
- 高野知恵子 「黒川真頼」『近代文学研究叢書』第八巻 昭和女子大学近代文学研究室 昭和三十三年四月
- ㉝ 前掲註㉑に同じ
- ㉞ 甲斐知恵子 「小杉楹邨」『近代文学研究叢書』第一一巻 昭和女子大学近代文学研究室 昭和三四年一月
- ㉟ 前田泰次編 黒川真頼著『工藝志料 増訂』東洋文庫二五四 平凡社 昭和四九年六月